

母体のエネルギー摂取量からみた非妊時 BMI 別の母体体重増加と 出生時体重との関係

三輪与志子 *¹⁾、久保田君枝 ¹⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学

【目的】

妊婦の栄養摂取状況からみた、妊婦の体重増加と胎児の発育を縦断的に調査したデータを基に、妊婦のエネルギー摂取状況と妊婦の体重増加、胎児の発育を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

A 市内の総合病院産婦人科に通院中の健康な妊婦で、本研究に了承の得られた 310 名中有効なデータの得られた 205 名を対象とした。妊娠中の妊婦の食事摂取内容を正確にデータ化するために、妊娠期間を妊娠 14 週～16 週を初期、妊娠 25 週～27 週を中期、妊娠 32 週～34 週を後期（以後初期・中期・後期とする）の 3 期に区分し、妊娠各期においてそれぞれ連続する 3 日間の食事を、間食も含めてすべてデジタルカメラにて撮影、写真から管理栄養士に栄養素別に摂取内容の分析を依頼した。さらに妊婦健康診査時には各時期の妊婦の体重増加と胎児の推定体重等を測定し、妊娠期間中のエネルギー摂取量と妊婦の体重増加と各期間の胎児の発育などを照合しながら縦断的に検証した。妊婦のエネルギー摂取量を把握し、妊婦の栄養摂取基準と照合し、対象妊婦が、妊娠中期および後期において栄養摂取基準値を「満たしている」か、「満たしていない」かを明らかにし、妊娠期間における体重増加量や胎児の発育との関係を検証した。統計解析には、統計ソフト IBM SPSS 22 for windows を使用して分析した。尚、本研究は浜松医科大学「医の倫理委員会」の審査を経て承認を受け実施した。

【結果】

対象妊婦の平均年齢は 31.5 歳、妊婦の非妊時 BMI の体格別人数は、やせ群が 52 人 (25.4%)、ふつう群が 137 人 (66.8%)、肥満群が 16 人 (7.8%) であった。母体体重増加量の平均は 10.5 ± 3.4 kg、出生時体重の平均は 2999.8 ± 375.8 g、妊娠各期の母体のエネルギー摂取量の平均は、妊娠初期 1571 ± 354 kcal、妊娠中期 1637 ± 313 kcal、妊娠後期 1622 ± 315 kcal であった。非妊時 BMI 別の母体体重増加量と出生時体重の比較では、やせ群で母体の体重増加が多いほど有意に出生時体重が重い ($p < 0.05$) という結果を得た。

【考察】

これより母体の体重増加量は出生時体重に影響する要因の 1 つとなり、母体のエネルギー摂取量は、妊娠全期を通して不足していること、妊娠中期、妊娠後期では、エネルギー摂取量が基準量を満たしている群は、満たしていない群よりも母体の体重増加は多い。また、BMI やせ群とふつう群は、母体の体重増加が多ければ、出生時体重も増加するということが明らかとなった。このことから、妊婦と次世代の健康のために、食事摂取基準量を満たすような摂取方法の工夫を加えた保健指導が必要であることが示唆された。

【学会発表】

第 55 回日本母性衛生学会（幕張）にて「母体のエネルギー摂取量からみた非妊時 BMI 別の母体体重増加と出生時体重との関係」発表（口演）2014 年 9 月 13 日

【論文発表予定】

日本母性衛生学会誌等に投稿予定